

近代日本の資本主義と修養主義に関する一試論

——群馬県桐生地方における企業内教育を事例として——

坂 根 治 美

Capitalism and Shuyoshugi in modern Japan

—— A case study on education in company in Kiryu, Gunma prefecture ——

Osami Sakane

Tsutsui proposed a hypothesis that Shuyoshugi was the ethos which sustained the development of capitalism in modern Japan. In order to examine this hypothesis, this paper analyzed the following two points.

① Relationship between Shuyoshugi movements and Seiichi Tejima, the president of Tokyo Koto Kogyo Gakko that played an important role in the process of the development of capitalism.

② Education in two representative modern companies in Kiryu district, both of which were run by the graduates of Tokyo Koto Kogyo Gakko.

Following points were made clear.

By the patronage of Tejima toward Shuyodan (a representative group of Shuyoshugi movements), many students of Tokyo Koto Kogyo Gakko became the member of this group.

Two graduates of this school who became the managers of the two major modern companies in Kiryu developed education in their companies based on Shuyoshugi. Both companies had good business performances and this Shuyoshugi movement permeated through the district.

Thus, a new hypothesis can be proposed that education based on Shuyoshugi in Tokyo Koto Kogyo Gakko had a considerable effect on the development of capitalism in Kiryu district.

Key words: capitalism, Shuyoshugi, education in company, higher education, modern Japan

1. はじめに—課題の設定—

日本資本主義の発展を支えた精神の問題について、筒井は次のような仮説を提示している。

日本の資本主義の発展にとって基幹となったエートスは何だったのかという問いは、今日あらためて問い直されて然るべきだと思う。昨今の内外の諸事件が日本の社会学研究者にこの問いを新しい問題としてつきつけ直しているように思われるのだ。

問題はあまりにも大きく、考証には周到な準備が必要とも思われるが、筆者は最近それを「修養主義」と規定できるのではないかと考えるようになった。この日本資本主義のエートスの起源を例えば儒教のように一つの教義体系に限定して論じていくアイデアはすでにいくつか存在するが、多神教的な日本社会の現実には照らしあわせた時、そこにはやはり無理があったと思う。もっと幅の広いカテゴリーでなければ現実には覆えない。その意味では「立身出世主義」

は最も現実に近いものだとは思いますが、このカテゴリーだけでは、「立身出世主義」規範から逸脱した人々をも包みこんで日本資本主義が発展してきた局面を十分説明できない。「立身出世主義」をも包みこんだカテゴリーとしての「修養主義」によって日本資本主義のエートスは解明されるのではないだろうか⁽¹⁾。

また、この近代日本の修養主義の消長について、筒井は次のようにまとめている。

(前略) 修養主義は講談社・修養団・青年団、そして様々な宗教団体等を通して大正・昭和期に着実に大衆化して浸透し、戦時期には「錬成」に押し込まれるが、戦後の復興期・高度成長期のエートスとなり、やがては昭和四〇年代以降衰退に向かう⁽²⁾。

本稿は、現時点ではこのようなひとつの仮説のある「修養主義」が、わが国の資本主義の発展とどのように関わっていたかを事例的に検討することを課題としている。具体的には、まず、産業化の過程を技術面で直接担った人々を養成した、わが国の代表的工業専門教育機関であった東京高等工業学校の校長（前身の東京工業学校時代も含む）を長期に亘って務めた手島精一の修養団運動との関係の実態を整理し、さらに地方レベルの問題として、群馬県桐生地方の代表的企業の経営者となった同校の卒業生達が修養主義とどのように関わったかを検討することを通して、近代日本の産業化のプロセスにおける修養主義の意味を探ることである。

蓮沼門三の修養団の目的が「① 自己の修養につとめ、人格の向上をはかり、② 相呼応して精神的教育を行い、③ 教育界を革正し、現社会を改善する」⁽³⁾ ことであつたという点にみられるように、近代日本の修養主義は基本的には人格主義であつたといわれている⁽⁴⁾。こうした非常に常識的なエートスが国民の教育において重視

されるというのは一面当然と考えることもできるが、その当然のことがわが国の資本主義の発展にとって有効に機能したとすれば注目すべき問題となる。

人格の向上という個々人の内面的問題が、世界的に注目されるわが国の経済発展につながるメカニズムを具体的な状況の中で確認することは、教育と社会の関係の問題を明らかにするうえで意味のある作業となろう。本稿が試みるのはこの確認のための一つの予備的作業である。

なお、検討の対象とするのは、修養主義が登場してくる1900年代初頭から、「錬成」概念が社会に行き渡る1930年代にはいるまでの時期である。

2. 手島精一の工業教育と修養主義

明治末期のアノミー状況の中で登場してきた修養主義運動を代表する蓮沼門三の修養団の明治末年度の賛助員の一覧が表1である⁽⁵⁾。近代日本を代表する大企業の幹部が多数修養団運動に関わっていることが、修養団運動がわが国近代企業の経営と密接に関係していたことを示唆している。

賛助員の中には教育機関の学校長や教員も多く含まれているが、中でも東京高等工業学校長の手島精一の存在は特に注目に値する。彼は、日本資本主義の発展を直接に担う工業関係者の育成においてわが国で最も大きな役割を果たしたといっても過言ではない東京（高等）工業学校の校長を長期間（明治23年～大正5年ただし明治31年1月から32年2月の期間を除く）務め、しかも全国の工業学校の設立にも大きな役割を果たして、わが国工業教育の父といわれる人物である⁽⁶⁾。その手島と修養団運動との関わりの実態を検討することは、産業化の過程における修養主義の意味を学校教育と関連させて考察するうえで重要であると考えられる。

手島精一は、東京（高等）工業学校の前身の東京職工学校の農商務省移管問題が起こったと

表1 修養団賛助員 (明治末年度)

渋沢 栄一	第一銀行頭取	早川千吉郎	三井家理事
森村市左衛門	森村組総長	高田 早苗	早大学長
河野 広中	代議士	森山章之丞	同文館
手島 精一	東京高等工業学校長	原 林之助	清水店
岡田 良平	文部次官	小西 信八	小石川盲啞学校長
添田 寿一	日本興業銀行	堀越善重郎	堀越商会
大田黒重五郎	芝浦製作所	諸葛小弥太	森村銀行
井上 友一	内務省神社局長	中島 徳蔵	東洋大評議員
床次竹二郎	鉄道院總裁	阪谷 芳郎	東京市長
服部金太郎	服部時計店	湯地 幸平	警視庁官房主事
二木 謙三	医科大学講師	新渡戸稲造	第一高等学校長
山岸弼次郎	赤心社書店主	杉田 稔	東京高等工業学校教授
亀井 忠一	三省堂	田中 喜一	〃
田所 美治	文部省普通学務局長	諸井 恒平	日本煉瓦製造
大橋新太郎	博文館	生江 孝之	中央慈善協会
井上哲次郎	帝大教授	堀田 貢	——
君島 潔	博文館	増田 義一	実業之日本社社長
降屋 虎尾	青森県立女子師範学校長	大炊御門幾鷹	侯爵
大隈 重信	早大総長	峰岸 米造	東京高等師範教授
大倉喜八郎	大倉組	小此木信太郎	医学博士
藤山 雷太	日本精糖	下田 歌子	実践女学校長
井上角五郎	代議士	小林 源蔵	代議士
乃木 希典	学習院院長	梅浦 精一	——
西沢 善七	東京市会副議長	福島甲子三	東京ガス
山本 留次	博進社	広瀬 実栄	森村銀行
大倉孫兵衛	日本陶器	柿沼 谷蔵	綿糸商
清水満之助	清水店	鈴木 一郎	三菱鉱業
清水 一雄	〃	佐々木勇之助	第一銀行
清水 釘吉	〃	石井 健吾	〃
松村 介石	日本教会主	古河虎之助	古河鉱業
後藤 新平	逓信大臣	日比谷平左衛門	鐘ヶ淵紡績
加藤 咄堂	修養家	近藤 廉平	元日本郵船
寛 克彦	帝大教授	浜口吉右衛門	鐘ヶ淵紡績
嘉納治五郎	東京高等師範学校長	和田 豊治	富士紡績
金原 明善	金原疎水財団	園田 幸吉	——
高柳豊三郎	読売新聞社	小松原英太郎	貴族院議員
辻 新次	帝国教育会長	蔵原 惟郎	代議士
滝沢菊太郎	青山師範学校長	久米 良作	東京ガス
松浦 玉圃	——	宮田 脩	成女女学校長
釈 宗演	円覚寺前管長	座間 止水	国民新聞
神保 周蔵	三省堂		

き、「工業教育と云ふことの如きに至つては、是は人格の修養が必要であるから、それは文部省内にある方が宜い」⁽⁷⁾と、校長就任以前の段階で既に人格の修養を重視する考えを表明しており、のちには「蓮沼門三氏の主唱にかゝる、全国専門学校學生の修養團に力を盡」⁽⁸⁾くしている。

修養團創設者の蓮沼門三は手島と修養團との具体的な関わりとして以下のような点を紹介している。

手島は、青年の風儀が廢れるのを慨嘆しその救済に心痛していた頃、創設後数年の修養團の存在を知り、蓮沼から団の内容の説明を受けて後援を約した。修養團の精神が工業者の修養の一助となり、同時に修養團の計画を社会に知らしめる手段になるとして、明治42年6月、東京高等工業学校で毎月開催されていた通俗講話会に若い蓮沼を異例のかたちで講師に招き、その結果多数の入団希望者が得られたこと。明治42年8月、蓮沼の最初の地方遊説にあたって多くの紹介状を書き、手島の門下生が校長を務めていた福島県立工業学校でも講演会が開催できたこと。明治43年1月の高工団員大会、同年5月の修養団大会（いずれも東京高等工業学校で開催）、大正2年4月の神戸支部大会等をはじめとする修養團の各会合には万難を排して出席し団員を激励したこと、さらには、大正2年の東京高等工業学校生徒のための修養團の合宿所「第二向上舎」（修養団本部と合併）新築にあたり、土地の取得等に尽力したこと、等である⁽⁹⁾。

これらの事実を紹介しながら、蓮沼は「團員の向上、本團の發展に盡瘁せられしは、吾人の感激して止まざる處」、「吾人の終生忘るゝこと能はざる處」と手島に対する感謝を述べているのである⁽¹⁰⁾。

このように手島が修養團に援助を与えたということは、多くの東京高等工業学校生徒が修養団活動に参加するという結果をもたらしたのであるが、前掲の修養団賛助員中に杉田稔、田中喜一の2人の同校教授が含まれていることも、

同校と修養主義の関係を考えるうえで注目されるのである⁽¹¹⁾。さらに、手島が単に同校ばかりでなく広くわが国工業教育界の指導者であったことを考えると、彼がこうした運動に積極的に関わったことは、同校や他の専門学校において養成された工業者のエートスに修養主義の影響が及んだと考えられるのであるが⁽¹²⁾、次章ではこの点を事例的に明らかにするために、群馬県桐生地方における東京（高等）工業学校卒業生の活動の実態を検討してみることとする。

3. 桐生における企業経営と修養主義

筒井は企業経営者のエートスの流れを大企業から中小企業へという方向でとらえているが⁽¹³⁾、ここでは、わが国の資本主義と修養主義の関係が地方レベルにおいてはどのように展開していったかを具体的に検討してみたい。検討にあたっては群馬県桐生地方の近代における三大企業の経営者3人に注目し、これらの企業における修養主義的教育の実態を分析するとともに、その背景としての手島とこれら企業の経営者との関わりに注目することになる。

この3人はいずれも桐生出身で明治後期の桐生地方の指導者の中に出始めていた高等教育の修了者であり、しかも3人とも東京（高等）工業学校の卒業生という共通点を持っていた。これら経営者のエートスを検討してみると、当時の桐生の代表的企業の経営における修養主義の意味を、東京（高等）工業学校という近代日本を代表する実業教育機関の機能と関わらせながら考察することができるのではないかと考えるのである。

(1) 手島精一と桐生の織物産業

ここでは、近代桐生における織物産業ならびに実業教育と手島精一の関係を整理しておきたい。

まず注目したいのは、明治23年に、当時わが国唯一の官立工業学校であった東京工業学校の校長に就任した手島は、同校に染物専攻はあつ

でも織物専攻がなかったことに対して、織物科の必要性を主張してその新設を実現させているということである⁽¹⁴⁾。つまり、日本の工業専門教育における織物教育の創始者が手島であったということである。こうして、わが国の代表的機業地のひとつである群馬県桐生地方と東京(高等)工業学校との接点ができることになるのである⁽¹⁵⁾。

ところで、明治27年に実業教育国庫補助法が制定され、特に工業学校、徒弟学校が全国に設置される状況になると、手島はそのほとんどの設置において指導的立場にたつことになり、同時に各学校は東京(高等)工業学校の卒業生をその教員として採用することになる⁽¹⁶⁾。

桐生においても明治29年、前記補助法の補助金を得て桐生織物学校が設立されることになるが、同校の主なる教員として東京(高等)工業学校卒業生が勤務することになる。金子竹太郎、岩下龍太郎、前原悠一郎、前原準一郎等がその卒業生達であるが、このうち金子と両前原の3人は、それぞれ後に近代桐生の三大企業といわれる会社の経営者となっていく人物である。この3人の経歴は以下のとおりである。

前原悠一郎は、明治6年に桐生町に生まれ、明治30年東京工業学校染織工科を卒業し、帰郷して織物製造業自営後、明治32年桐生織物学校の教員となり、明治35年には模範工場桐生撚糸合資会社代表社員になる。

金子竹太郎は明治7年桐生町に生まれ、明治26年東京工業学校染織工科卒業後、明治29年桐生織物学校主席訓導(のち教頭)になり、明治40年に両毛整織株式会社合資会社代表社員になる。

また、前原準一郎は明治12年に桐生町に生まれ、明治35年東京高等工業学校紡織科卒業後さらに機械科に学び、明治38年に桐生織物学校教諭、明治39年に合資会社桐生製作所の代表社員となっている。

つまり、3人とも桐生の出身で手島校長時代の東京(高等)工業学校に学び、帰郷し桐生織

物学校の教員を経てそれぞれ三大会社の代表者になっていくという経歴である⁽¹⁷⁾。さらに、3人とも当時の桐生地方の主要経済人の団体であった桐生懇和会、また同地方の高等教育修了者の団体の無名会双方の会員であり、同地方の産業、教育の発展に重要な役割を果たしている。当時の桐生町の税金額の等級表から位置づけると、この3人はいずれも町の上位一割の内に入る経済的上層であり、前原悠一郎は両毛整織、桐生製作所の役員を、金子竹太郎は桐生撚糸の役員をそれぞれ兼務していたことから、団体活動ばかりではなく実質的な企業経営においても密接な連携関係にあったと考えられる⁽¹⁸⁾。

以下、三大企業のうち、特に模範工場桐生撚糸合資会社(のちに模範工場桐生撚糸株式会社、さらに日本絹撚株式会社と社名変更)と合資会社桐生製作所(のちに桐生機械株式会社と社名変更)の経営と修養主義の関係に特に注目してみたい⁽¹⁹⁾。

(2) 模範工場桐生撚糸合資会社の経営と修養主義

模範工場桐生撚糸合資会社は、明治政府の産業助長政策に基づき15,000円の撚糸機の払い下げを受けて、資本金30,000円で明治35年12月に設立され、37年5月に開業した会社である。設立にあたって当時の桐生の最有力者森宗作、書上文左衛門、大澤福太郎と金子竹太郎により協議がなされ、代表者として東京工業学校出の前原悠一郎に白羽の矢が立てられたのである。以後明治39年60,000円、明治40年100,000円と増資が続き、明治41年の株式組織への変更(資本金150,000円)後さらに明治43年に250,000円、大正6年に600,000円と増資され、大正7年には資本金3,000,000円の日本絹撚株式会社が設立されるにいたる⁽²⁰⁾。

以下、同社の経営と修養主義の関係を会社の発展にあわせてみていくことにする⁽²¹⁾。

① 模範工場桐生撚糸合資会社時代

(明治35年12月～明治41年9月)

同社では明治37年に学校式の夜学を開始し、

読書、算術を課していたが、明治40年には修身、裁縫の2科を加え、その内容を充実させている。また、精神修養のため社長等による修養講話会をも開設している。

明治41年には月刊の機関雑誌『模範』を創刊している。この雑誌の目的を述べた発刊の辞の中の「職工諸君ノ指導者トナリ以テソノ品性ト知識トヲ高ムベク」との言葉に修養主義の影響がみられるが、社長執筆の社説には次のような一節がある。

とかく職工といへばみづからいやしきものゝようにかながへるものがあるけれども決して自分の身をいやしむには及ばない、毎日自分のつとむる仕事により身を入れてはたらき行ひを正しくしてまちがったことをしなければその人はどんな家業にしても少しもはづることはないのであるからみなさんもどうかその心えで行ひを正しく仕事を勉強し又ひまがあればよく會社の先生のいふことをききよみかきやさいほうをならつてりつばな人にならなければいけない⁽²²⁾。

社会的地位にかかわらず正しい行いをして仕事に励むことこそが尊いのだと社長は説く。筒井の分類による修養主義の説得戦略の「成功不問型」⁽²³⁾の論理が使われているのである。襷糸工場という女子型の職場においては、地位に関わらず自らの仕事に忠実であれというこの説得戦略が経営上特に有効なものであったことは容易に首肯できよう。

② 模範工場桐生襷糸株式会社時代

(明治41年10月～大正7年7月)

明治42年の講堂の落成を機に従来の学校式教育を改善し、修身、国語、算術、唱歌、裁縫の教育を行うこととし、大正5年の工場法施行後は単級組織の特別学級を設けて尋常小学校の課程を修了させることになる。

一般従業員向けの修養講話は前時代と大差な

かったが、明治42年、宗教心涵養のため講堂に阿弥陀仏を安置し一同に礼拝させることも始めている。

③ 日本絹襷株式会社時代

(大正7年8月以降)

大正8年4月、従業員幹部により精神修養のための団体「修養會」が設立されているが、その会則は以下のとおりである⁽²⁴⁾。

第一條 本會ハ修養會ト稱ス

第二條 本會ハ日本絹襷株式會社職員及男子作業員ノ有志者ヲ以テ組織ス

第三條 本會ハ精神修養ニ努メ相互ノ親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達センカ爲メ毎月一回例會ヲ開キ會員ノ經驗ト研究ニヨル修養談ノ交換ヲナシ人格ノ向上ヲ圖ルモノトス但シ臨時會ヲ開キ知名ノ士ヲ招聘シテ精神講話ヲ依頼スルコトアルベシ

第五條 本會ニ圖書部ヲ置キ會員ノ修養ニ資スルモノトス但貸與規定ハ別ニ之ヲ定ム

第六條 會員ハ各自品行ヲ慎ミ其職ヲ勵ミ實踐躬行自ラ他ノ模範タラムコトヲ期ス

第七條 本會ハ事務所ヲ日本絹襷株式會社内ニ置キ會長一名幹事五名ヲ置キ會務ヲ處理スルモノトス

第八條 會長ハ社長ヲ推戴シ幹事ハ會員ノ互選ニヨルモノトス但シ任期ハ一年ト定ム

人格の向上をめざし、各自の職務に励むことを目標としたこの「修養會」は、会長を社長が務めることにみられるように会社側の意向に添う性格を有していたと判断できるが、このことは修養主義が企業の業績向上につながるさらなる契機となったと判断できよう。

つづいて大正8年9月には、機関雑誌『模範』の後身『絹與利』が内容を充実して創刊されているが、その巻頭の辞において前原社長は、デ

モクラシーの思潮が風靡する社会情勢にあって同社創立以来の皇室中心主義、大家族主義を強調し、次のように述べている。

今上陛下の赤子、何ぞ濫に世界の風潮をのみ説くや、宜しく根本義に溯つて身を修め心を耕し、熱誠以て世に處し、國威の伸張と邦家の富強を圖らざる。吾社々風の大本も亦即ち茲にあり、家族的温情を以て組織的業務に當り克く社運の隆昌を遂げて國家に貢献する所あらんとす、諸氏等しく微衷を諒し、工業の發展に資し國民の本分を盡されよ⁽²⁵⁾。

ここに、従業員への修養による会社の発展さらには國家に対する貢献への期待が明らかに示されるのである。

大正9年4月には、実業補修学校規定に準拠して日本絹撚工業補修学校を開設し、『工場女子修身書』を編纂して教科書としているが、前原社長はその序文においても同趣旨の考えを表明している。

昭和期にはいると、昭和3年には社訓および修養の三大綱領が制定されるが、具体的教育として、職員に対しては仏教講話、論語の連続講演会等を行い、経済もまた道徳を基礎とすべき日本の経済観の養成に努めている。また、「作業上の心得」七項を制定しているが、そのうちの一項として「仕事の成績をあげるには修養が必要である」⁽²⁶⁾が含まれている。

以上のように、桐生撚糸（日本絹撚）では社内における従業員教育の基本的理念として「修養」が重視されているのであるが、それは前原社長の國家観と密接に関連するものであり、以後時局の進展とともにこうした理念はさらに強調されていくことになるのである。

(3) 合資会社桐生製作所の経営と修養主義
合資会社桐生製作所は、桐生地方に明治30年頃から需要が出てきた織物の準備機・整理機、金箒の供給のために、明治39年に資本金10,000

円で設立された会社である。出資者と出資額は、無限責任社員として、前原準一郎5,000円、前原悠一郎500円、有限責任社員として森宗作2,500円、書上文左衛門1,000円、大澤福太郎1,000円である。森、書上、大澤の3人の地元有力者の後援を得て前原準一郎が代表社員となり、それを従兄の前原悠一郎が助けるかたちをとっている。以後、明治43年15,000円、明治44年20,000円、大正2年50,000円と増資し、大正6年に桐生機械株式会社を設立（桐生製作所を合併し資本金100,000円）しており、大正7年さらに350,000円に増資している⁽²⁷⁾。

前原準一郎は、同社と修養団との関わりについて以下のように語っている。

社員の採用には特に慎重考慮し、単に才能の優れた者よりも徳性に重きを置いたのであります。而して従業員の錬成には修養団の運動が大なる力となつたのでありまして、當地方で早くから此の運動に参加した故田村吉之助・小島貢兩氏などの驥尾に附し、我が社では西原・藤林兩職長等の主唱により、大正の終り頃から従業員の中に熱烈な修養団運動が燃え上り、昭和二年の天長節に團長平沼男爵の代理として二木博士の臨席あり、當社支部の結盟式を挙げたのであります。此の運動こそ眞に下から盛り上つた力でありまして、其後數年間當社に於ける此の運動の盛であつた時代には社内の氣分も別して明朗でありました⁽²⁸⁾。

修養団運動については社長の主導ではなかったことが語られているが、社員の徳性を重視するという彼の経営方針が、同社における修養団支部の結成につながったと考えることができよう。

この運動について同社の社史には以下のような記述がみられる。

個人の修養と人格向上のための運動が、

不況最中の大正15年秋ごろから有志の間で起こり、当時盛んになりつつあった蓮沼門三氏の主唱する修養団運動に共鳴して参加する者があった。その後、社内にこの運動が急速に広まり、翌昭和2年初めには会社でも取上げて全社的のものとなった。そして1月30日全員入団、同年4月29日の天長節（現天皇誕生日）に修養団本部から団長代理を招いて、修養団桐生機械支所の結盟式を行った。以後全社的に熱烈な運動を展開、桐生の街中にも広く知れ渡り、共鳴者も多数現われた。そして各所で随時行われた講習会などには積極的に多数参加受講し、修養団精神の「総親和・総努力」の実現に努めた結果、社内は一段と明るく社員相互の信頼性を増し、結束が高まり、作業能率が向上したため、当時の深刻な不況にもかかわらず、さしたる影響を受けることなく切り抜けることができた⁽²⁹⁾。

これらの資料の語るように、修養団支部の結盟式以後の「數年間当社に於ける此の運動の盛であつた時代には社内の氣分も別して明朗であり」、「社内は一段と明るく社員相互の信頼性を増し、結束が高まり、作業能率が向上したため、当時の深刻な不況にもかかわらず、さしたる影響を受けることなく切り抜けることができた」とこの運動と会社の業績の直接的な関連性が指摘されている。会社内部の判断として、修養主義の運動が経営業績向上の効果を持ったとされているのである。さらに、そうした状況下で修養団運動が桐生地方に浸透していく状況も示されている。

こうした意味を持ったと判断された社内における修養団運動と手島精一との関連について、前原準一郎は社員に対して次のように語っている。

（前略）當社の特長としては、一同が皆眞面目に眞劍に働き各自の職分奉公に勵んで

産業報國の實を擧ぐると共に、絶えざる反省自肅によつて心身の練磨と倦まざる研鑽をなし、技能の向上を期し、謙虚、推讓、眞に人間として相頼り相援け、互に信頼し且つ各方面との交渉取引について安心されてゐることである。これこそ我社の傳統精神として、既に諸君が今日迄實踐し續けて來た所のもので、今後も亦忘れてはならないのである。現に創立當初の如きは、教室等の設備はなくとも作業場即ち道場、作業即ち教化訓練といった觀念を以て仕事を通して生活に徹し専ら人を造ること立派な日本人たらしめることを主眼とし、従つて體位の向上、健康の増進、疲勞の防止のための設備には特別の注意を拂つて、渝ることなき努力を盡して來た積りである。

これ等の點については、學生時代から特別の御指導を蒙つた元の東京高等工業學校長故手島精一先生の感化の賜と深く感銘してゐる。最近故先生の遺稿集を讀むと、大正時代に於ける御高見が載せてあつたが全く今更の如くその御明識に敬服する外はないばかりか、その手島先生を育ての親とする修養團運動も當會社と創立の年を同じふしてゐるといふ淺からざる因縁を思ふのである⁽³⁰⁾。

東京高等工業學校紡織科を卒業した前原準一郎は、手島の勧めによつてさらに機械科で勉学を続けることとなるが⁽³¹⁾、この発言にみられるように、東京高等工業學校生時代から前原準一郎にとって手島精一の存在の意味は大きく、思想的にもその影響下にあつたと考えることができよう。

東京工業學校長就任以前から工業教育における人格の修養を重視していた手島を通して修養主義的思想が地方経営者に広まっている状況の一つの事例をここにみることもできるといってよいだろう。

4. 結 論

以上のように、「錬成」概念が社会に行き渡る前の昭和初年の時期までに限定しても、桐生における代表的企業において修養主義が社員教育の理念として重視されていた状況を確認することができる。

企業経営者の立場として従業員の修養を重視するのは、一面当然のことと考えることもできるのではあるが、桐生撚糸(日本絹撚)、桐生製作所(桐生機械)の2つの企業においては非常に具体的なかたちで修養主義にのっとりた教育が行われていたといえることができよう。桐生機械の資料が語っていたように、同社において修養団運動が始まったのは大正末の不況最中の時期であったが、運動の結果としてそれをのりきったという判断が示されているし、同時に桐生地方にこの運動が広まっていく状況もみられたのである。もう一方の桐生撚糸(日本絹撚)についても増資状況をみる限り同社の成長はめざましい。日本資本主義の発展過程において、地方の企業においてもこうした状況がみられたということを、冒頭に引用した筒井の仮説を支持するかたちで理解することができるのではないかと考える。

こうした地方での修養主義の広まりを考えるうえで、本稿では東京(高等)工業学校を舞台にした師弟関係に注目してみた。そもそも手島が同校に織物科を設けたことが機業地桐生と同校の深い関係の始まりとも考えられるが、前原準一郎の発言にみられた彼と手島の関係を、同校における教育が修養主義の地方への浸透に果たした役割を示す一つの証拠と考えることができるといってもよいだろう。こうした状況に注目すると、桐生地方における経済発展に関しては、東京(高等)工業学校における修養主義的教育が少なからぬ影響力を持ったという新しい仮説が提示できると考えられる⁽³²⁾。

註

- 1) 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会的考察』岩波書店 1995年160頁。
- 2) 同上書35頁。
- 3) 修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史 概史』(財)修養団 昭和60年37頁。
- 4) 筒井前掲書18頁。
- 5) 前掲『修養団運動八十年史 概史』62～63頁。
- 6) 日本英雄傳編纂所編『日本英雄傳 第六巻』非凡閣 昭和11年572頁。
東京高等工業学校は明治14年に東京職工学校として開設され、明治23年手島の校長就任とともに東京工業学校へ、さらに明治34年には東京高等工業学校へ名称変更している。本稿では、東京工業学校、東京高等工業学校双方を示す場合は、東京(高等)工業学校と略記する。
なお、手島は東京職工学校の設立に与って大いに力になったといわれている。手島工業教育資金團『手島精一先生傳』昭和4年2頁。
- 7) 東京工業大學編『東京工業大學六十年史』東京工業大學 昭和15年144頁。
- 8) 前掲『手島精一先生傳』298頁。
なお、明治39年に創設された修養団では、手島を渋沢栄一、森村市左衛門とならぶ草創期の功労者と位置づけている。修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史 資料編』(財)修養団 昭和60年78頁。
- 9) 同上『手島精一先生傳』301～310頁。
なお、東京高等工業学校の修養団支部設立は、蓮沼の同校での講演当日(明治42年6月15日)付けとなっている。同上『修養団運動八十年史 資料編』88頁。
- 10) 同上『手島精一先生傳』306,310頁。
- 11) 杉田稔は東京高等工業学校の生徒監を務めた人物である。同上書304頁。
- 12) 手島は岸田軒造を通じて修養団の存在を知るにいたっているが(同上書302頁)、修養団の「主要運動関係者(故人)略歴」に掲載された41名のうち、その岸田軒造、竹内浦次、中安閑一の3名が東京(高等)工業学校出身者である。前掲『修養団運動八十年史 資料編』67～85頁。
- 13) 筒井前掲書124頁。
- 14) 前掲『手島精一先生傳』115頁。
- 15) 後出の前原準一郎によれば、彼が高等小学校

- を卒業した明治27年には群馬県内では中学校は前橋にしかなかったが、同年に桐生からそこへ入学したのは彼の他1名のみであった。しかし、前原(明治35年東京高等工業学校卒業)以前に東京(高等)工業学校を卒業した桐生の出身者は、金子竹太郎(明治26年卒)、岩下龍太郎(明治29年卒)、前原悠一郎(明治30年卒)、小島常太郎(明治31年卒)、中里新太郎(明治34年卒)の5名を数えている(群馬大学工学部創立五十周年記念会編『群馬大学工学部五十年史』群馬大学 昭和40年329頁)。このことは、当時、桐生から東京(高等)工業学校へ進学するという伝統が存在したことを示していると考えられる。
- 16) この点に関して、手島の伝記には次のような記述がある。
「さて、当時地方工業学校の設立に就ては、皆その指導を、東京工業学校に求めたもので、又、その校長教員も、殆どすべて、東京工業学校の卒業生を採用したのであるから、先生は、喜んで、地方工業学校の設置を指導し、又、己が懐抱する工業教育上の意見を、その養成せし子弟に依つて、廣く實行せしめられたものであります。それ故に先生が、東京工業学校長在職の間、地方に設置された工業学校、又は、徒弟学校にして、その一校だも、先生に相談しないで出来たものは、無かったのであります。」前掲『手島精一先生傳』125頁。
- 17) これらの会社が近代桐生の三大会社であることは、桐生市史編纂委員会編『桐生市史 中巻』桐生市史刊行委員会 昭和34年608頁。
- 18) この3人の経歴、活動については、拙稿「大正初期の地方高学歴層と地域社会—群馬県桐生町における中学校創設運動をめぐって—」『東北大学教育学部研究年報』第41集1993年で扱っている。なお、両前原は従兄弟の関係にある。前原悠一郎翁傳記編纂會編『前原悠一郎翁傳』昭和19年第1編79頁。
- 19) 本稿では両毛整織株式会社合資会社(のちに両毛整織株式会社と社名変更)については扱わないが、同社にものちに修養団の支部が設置されていることから、同社の経営も修養主義と浅からぬ関係があったとすることができよう。前掲『修養団運動八十年史 資料編』94頁。
- 20) 前掲『前原悠一郎翁傳』第1編32~36頁および正木重之編『桐生商工案内』桐生三友會 大正10年50~54頁他。
- 21) 以下の社内教育の内容については、日本絹撚株式会社創立四十年史編纂會編『日本絹撚株式会社創立四十年史』日本絹撚株式会社 昭和18年による。
- 22) 同上書64頁。
- 23) 筒井前掲書164~165頁。
- 24) 前掲『日本絹撚株式会社創立四十年史』169~170頁。
- 25) 同上書171~172頁。
- 26) 同上書202頁。
- 27) 前原準一郎『桐生機械株式会社経営の回顧と感謝』昭和17年4~6頁および前掲『前原悠一郎翁傳』第1編79~80頁。
- 28) 同上『桐生機械株式会社経営の回顧と感謝』34頁。下線は原著者。
- 29) 桐生機械社史編集委員会編『桐生機械社史』桐生機械株式会社 昭和56年45頁。
- 30) 桐生機械株式会社『前社長前原準一郎氏 新社長石井太吉氏 送迎記念録』昭和16年39~40頁。
- 31) 前掲『前原悠一郎翁傳』第1編79頁。
- 32) 冒頭で引用したように、修養主義の担い手として講談社が重要な役割を果たしたといわれているが、講談社の創設者野間清治は桐生の出身者である。桐生における修養主義の考察において野間の位置づけの検討も忘れてはならない課題となろう。

(平成9年5月30日受付, 平成9年7月15日受理)